

平成22年6月28日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19530468

研究課題名（和文） 『ザ・タイムズ』における「試験」言説の比較歴史社会学

研究課題名（英文） Comparative Historical Sociology of Discourses of "The Times" on Examinations

研究代表者

尾中 文哉（ONAKA FUMIYA）

日本女子大学・人間社会学部・教授

研究者番号：90233569

研究成果の概要（和文）：

本研究は、「歴史」をふまえた「比較」の方法に関する、新聞を資料とした一連の実験的考察の一部である。そこでは、(1)1980年前後に、日本の受験生の態度が「受験に対する否定」から「中立」に変化すること、(2)試験成績の公開に関してイングランドとウェールズで90年代以降違いが生じたこと、(3)この90年ほどの間に試験制度の変化が量的な観点を強化されていくこと、(4)この変化は、イギリスの場合には試験の教育制度への統合過程、日本では逆にその分離過程と関連していることが明らかとなった。こうした研究を通して、このタイプの研究には、「言説」よりも「記事」という視点が適切であるとした。また、具体的な方法論として「逆欠如視点」「社会文化的ネットワーク分析」を提案した。

研究成果の概要（英文）：

This research is an experimental study on comparative sociology based on historical method using newspapers as the main source of data. It revealed that: (1)The Japanese students' negative attitude to the entrance examination competition has changed positive around 1980's. (2)The way of publishing examination result has been different between England and Wales since 1990's. (3)In the change of examination system during this ninety years, quantitative points of view has gradually been strengthened. (4)This change has relations to a gradual incorporation of the examination system into the whole education system in England, while it is related to a gradual separation in Japan.

It suggested that the viewpoint of "articles" is more effective than that of "discourses" in this type of research. It also suggested "comparison with the Japan-case" and "socio-cultural network analysis" as methods of analysis.

交付決定額

(金額単位：円)

|        | 直接経費      | 間接経費      | 合計        |
|--------|-----------|-----------|-----------|
| 2007年度 | 1,700,000 | 510,000   | 2,210,000 |
| 2008年度 | 1,500,000 | 450,000   | 1,950,000 |
| 2009年度 | 300,000   | 90,000    | 390,000   |
| 年度     |           |           |           |
| 年度     |           |           |           |
| 総計     | 3,500,000 | 1,050,000 | 4,550,000 |

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：新聞、比較、歴史、試験、記事、言説、受験、ネットワーク

### 1. 研究開始当初の背景

(1) この研究を開始するにあたっての背景の第一は、「比較」の方法についてである。社会学における従来の「比較」は、高度に理論的なものか、政府統計やアンケート調査を用いた横断的な国際比較であることが多く、「歴史」という視野と対立しているかのごとく捉えられることが通例であった。そうした状況を打開することが必要とされていた、というのが一番目の状況である。これについては、既に前回の科研で一定の試みをしたものの、必ずしも十分に成功といえるまでに至っていなかったため、試みを深化させる必要があった。

(2) 背景の第二は、「試験」という事象の論じ方である。この主題については、従来「測定」とみるような客観主義的な考察がなされてきていた。80年代以降「象徴」や「文化」という概念に依拠するブルデュー的な論じ方が導入されたものの、それは「階級再生産」というプロセスへ関心を向けさせる一方、「試験」という事象それ自体にはあまり関心を向けず、「試験」の論じ方自体は特に変化したとはいえない。そうした状況をなんとか打開する必要があったということである。

### 2. 研究の目的

(1) 第一の背景については、比較可能性の高い歴史的資料を収集し分析することで、「歴史」と「比較」を接合するような研究を遂行してみること、というのが一番目の目的として設定された。

(2) 第二の背景については、「言説」という概念ないし方法を活用して「試験」についての新しい論じ方を確立できるものかどうか試行してみるという課題が設定された。「言説」は特に90年代以降の日本で期待されてきた方法論のひとつであり、それを用いることが第二の背景についてどの程度有効か検討してみる必要があったのである。

(3) 第三に、同様の問題意識に基づいて実行した前科研では、韓国と日本という、近接し関連の深い事例間の比較について取り上げたが、今科研ではイギリスと日本というかなり遠い事例間の比較について取り組んでみるのが三つ目の目的であった。

### 3. 研究の方法

(1) こうした目的について、前科研同様に新聞資料の比較歴史的分析という方法で取り組むこととなった。今回は『ザ・タイムズ』と『朝日新聞』の「試験」関連記事とインタビュー調査を活用し、1920年代から1990年代にかけての「試験」言説の変化のありようを特徴付けてみるという方法を採用することとなった。

(2) これにあたり、日本の努力主義・能力主義・メリトクラシーなどについての歴史研究を行ってきた大川清丈、またフランスの高等教育を専門とする白鳥義彦に協力を得て、上記の研究を実施することとなった。

### 4. 研究成果

本科研の研究成果の大部分は、『試験関連記事に関する比較歴史社会的考察(中間報告)』と題する冊子体報告書にまとめている。

(1) まず序(尾中)では、1. 試験という主題の重要性、2. 新聞という資料の方法的意義、3. 「記事」という視点、4. 比較歴史社会学という方法、5. テキスト分析の技法、6. インタビュー調査の併用、7. 研究の進行について、概説的に紹介している。この中で、本研究の進行の中で、新聞記事の分析を進めていく中で「言説」という視点が必ずしも有効ではなく、テキストが意味することと、テキストがその意味をとおして指し示すものの両面から分析することが必要でありかつ重要であることが明らかとなり、その観点から「記事」という視点を採用して報告書をまとめた、という全体の方針が提示されている。

(2) 第1章(大川)では、「新聞投書欄から見た「受験」と努力主義」と題し、『朝日新聞』の1980年前後の「声」欄のなかから受験という語を含む投書について、「努力主義」という観点から考察を行っている。ここで大川は、努力主義を「がんばり系」「努力系」「忍耐系」「競争系」「その他系」の五つに分け、それぞれに対応する語彙を選定し、それをマイニングソフトを活用して1977年～1982年の6年間の『朝日新聞』について計測した。かつそれを受験に対する態度と関連させることで、この期間において「努力主義」が「受験への否定」から「受験への中立」に推移しつつあることを明らかにし、この背景には

「1979年からの国公立大学共通一次試験実施」その他の事情があるのではないかという考察を行っている。

(3)第2章(大川)では、「努力主義の日英比較—「逆欠如」という観点から—」と題し、『ザ・タイムズ』の記事について「逆欠如」という視点からの日英比較の提案を行っている。「意図的日本中心主義の文化・社会の比較研究の方法論」と定義されるこの方法論にもとづき、「努力と才能」「イギリスの日本化」という二つの論点を提示している。

(4)第3章(尾中)では、『School Certificate examination』から『GCE O level』へ」と題し、1910年代から1980年代前半にかけての『ザ・タイムズ』の中等教育試験関連記事の変化について論じ、量的なまなごしの重要化、およびその社会的意味として「国家の市場化」という論点を提示している。

(5)第4章(尾中)では、『GCE O level』から『GCSE』へ」と題し、1980年代後半から2000年代にかけての『ザ・タイムズ』の中等教育試験関連記事の変化について論じ、第3章と同様の傾向の確認と同時に、そこに関連して「準市場」という改革の内容を含めて考察を行っている。

(6)第5章(白鳥)では、「イングランドにおけるリーグテーブル」と題し、記事内容とインタビュー調査の結果をふまえ、試験成績の公開が、「統一試験」の実施を背景としながらも、イングランドとウェールズ・スコットランドでは異なる方針を採用しているなど、他の問題や困難の中で行われていることを明らかにしている。

(7)また、本中間報告書におさめきれなかった研究成果のひとつに、「試験関連記事の社会文化的ネットワーク分析」(尾中)の内容がある。それは、『タイムズ』および『朝日新聞』の1926-27年、1935年、1944年、1953年、1962年、1971年、1980年の試験関連記事のテキストを文(Sentence)単位に分割し、テキスト分析ソフトにかけることで、用語間の関連についてネットワーク論的に分析したものである。それは、「試験」「教育」といった「文化項目」と「政府」「大学」「学校」「学生」「保護者」「教員」といった「アクター項目」に区別し二重化して分析する「社会文化的ネットワーク分析」である。結論的には、第一に、文化項目のみで考えたとき、「試験」と「教育」の関連性が当初『タイムズ』よりも『朝日』において強かったが、年代が下るにつれ、そうした違いはみられなくなってくる、ということである。第二に、「文化

項目」「アクター項目」の全体について考えたときには、『タイムズ』は「教育」「学校」「学生」サイドと「試験」「教員」「保護者」サイドに分かれる傾向があり、60年代70年代になるとそれが合体していく傾向がみられる。それに対し逆に『朝日』においては当初すべての項目が一体のネットワークを構成していたのに対し、70年代以降「試験」「政府」「塾」からなるクリークが独立していく、という傾向がみられた。このことは、一面では新聞というテキストがそのように編成されていったということと関わっているが他面では、この間に行われた制度の改革(GCEの開始、大学入試センター試験の開始)がそうした傾向をもっていたということをも意味していると考えられた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

(1)尾中文哉「社会学における「分厚い比較」の方法について」日本女子大学紀要人間社会学部、19号、査読なし、2009年、pp.1-10。  
([http://ci.nii.ac.jp/els/110007058383.pdf?id=ART0008992062&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order\\_no=&ppv\\_type=0&lang\\_sw=&no=1274512325&cp=](http://ci.nii.ac.jp/els/110007058383.pdf?id=ART0008992062&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1274512325&cp=))

(2)白鳥義彦「フランスの高等教育をめぐる新たな動き」『社会学雑誌』25、査読なし、2008年、pp.62-71。

(3)尾中文哉「社会学における「分厚い比較」の意義について」日本女子大学紀要人間社会学部、18号、2008年、査読なし、pp.1-10。  
([http://ci.nii.ac.jp/els/110006616342.pdf?id=ART0008633230&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order\\_no=&ppv\\_type=0&lang\\_sw=&no=1274512366&cp=](http://ci.nii.ac.jp/els/110006616342.pdf?id=ART0008633230&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1274512366&cp=))

〔学会発表〕(計7件)

(1)尾中文哉「試験関連記事の文化的ネットワーク分析—新聞記事を比較する(1)—」日本教育社会学会第61回大会、(2009年9月12日、早稲田大学)。

(2)大川清丈「新聞投書欄から見た「受験」と努力主義—新聞記事を比較する(2)—」日本教育社会学会第61回大会、(2009年9月12日、早稲田大学)。

(3)白鳥義彦「イングランドにおけるリーグテーブル—新聞記事を比較する(3)—」日本教育社会学会第61回大会(2009年9月12日、早稲田大学)。

(4)大川清丈「儀礼としての努力主義」日本社会学会第81回大会(2008年11月23日、東北大学)。

(5)白鳥義彦「フランスにおけるグランド・ゼコール進学者」日本教育社会学会第60回

大会(2008年9月20日、上越教育大学)。

(6)大川清丈『『勉強』『頑張り』と日本社会』、日本社会学会第80回大会(2007年11月17日、関東学院大学)。

(7)白鳥義彦「フランスにおける『アフターマティブ・アクション』をめぐって」2007年度日仏教育学会(2007年10月28日、愛知県立大学)。

〔図書〕(計3件)

(1)尾中文哉・大川清丈・白鳥義彦『試験関連記事に関する比較歴史社会学的考察(中間報告)』日本女子大学人間社会学部、2010年、(総ページ数60ページ)。

(2)大川清丈『『勉強』『頑張り』と日本社会』(西村健監修、藤本修他編『メンタルヘルスへのアプローチ—臨床心理学、社会心理学、精神医学を融合して』所収)ナカニシヤ出版、2010年、pp.117-126(総ページ数213ページ)。

(3)白鳥義彦『『五月革命』と大学』(富永茂樹編『転回点を求めて—一九六〇年代の研究』分担執筆)、世界思想社、2009年、pp.281-297(総ページ数347ページ)。

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

尾中 文哉 (ONAKA FUMIYA)

日本女子大学・人間社会学部・教授

研究者番号：90233569

### (2)研究分担者

大川 清丈 (OKAWA KIYOTAKE)

甲子園大学・人文学部・准教授

研究者番号：80299507

(H21：連携研究者)

白鳥 義彦 (SHIRATORI YOSHIHIKO)

神戸大学・文学部・准教授

研究者番号：20319213

### (3)連携研究者

なし